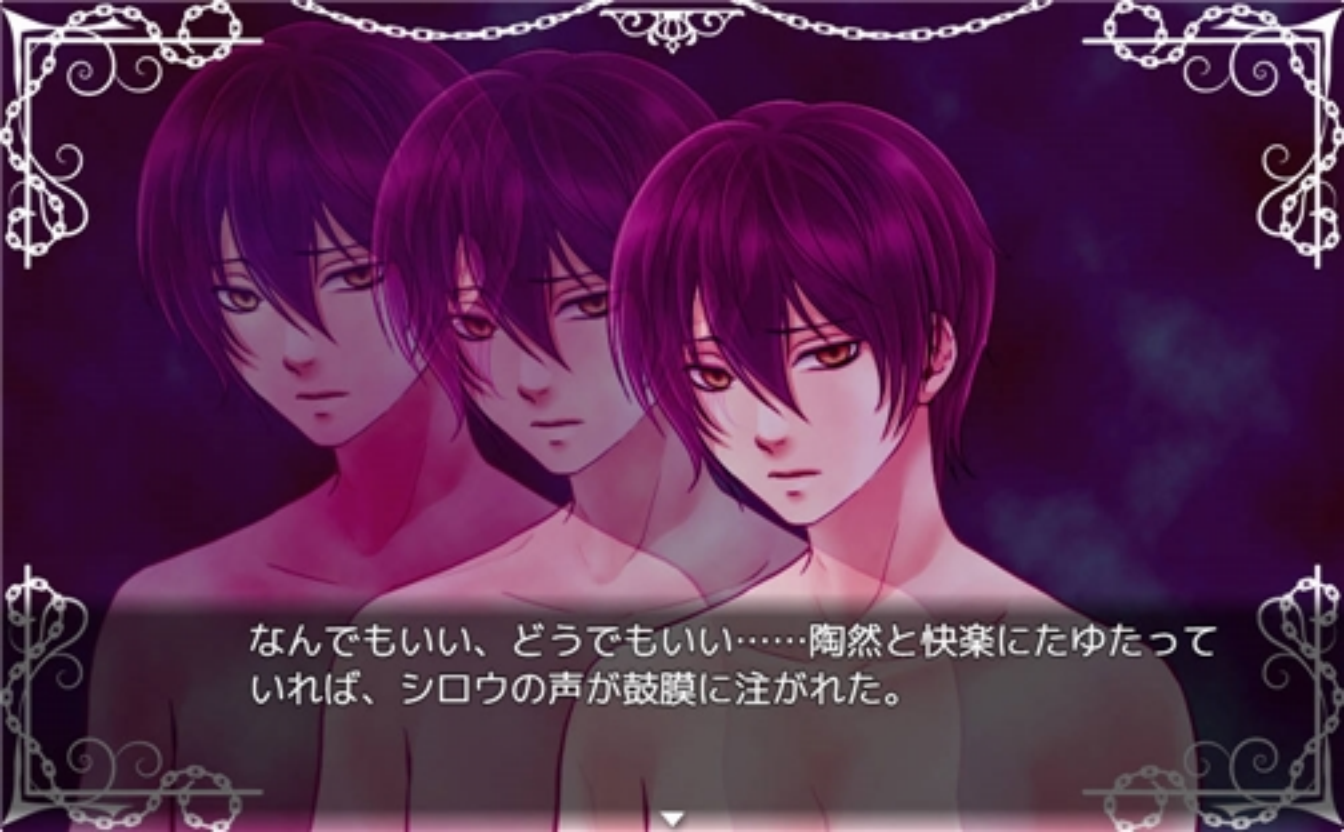
されて嫌なことなんて、あるわけもなく。

気持ちよくなれるなら、なんだってよくて。


なんでもいい、どうでもいい……陶然と快楽にたゆたって
いれば、シロウの声が鼓膜に注がれた。

[三月シロウ]
「なんでもいい、どうでもいい……誰だっていい、か？」

[小鳥遊レイ]
「！」

はうううぅ
ビクンッ
ああぁ
はぁはぁ
ビクンッ
ビクンッ
ばっと現実に引き戻される。

はうぅぅ
ビクンッ
ああぁ
はぁはぁ
ビクンッ
ビクン
目隠しを取り払われれば、いつもと寸分違わぬ姦濫たる光
景を目にして身体がずくんと疼く。

はうぅぅ
ビクンッ
ああぁ
はぁはぁ
ビクンッ
ビクン
思わず身動ぎすれば、首と四肢に付けられた拘束具から伸びる鎖が小さく鳴った。

はうぅぅ
ビクンッ
ああぁ
はぁはぁ
ビクンッ
ビクン
[小鳥遊レイ]
「ン……」

はうううぅ
ああぁ
はぁはぁ
ビクンッ
ビクンッ
ビクン
[三月シロウ]
「違うのか？」

はうぅぅ
ああぁ
はぁはぁ
ビクンッ
ビクンッ
ビクン
[小鳥遊レイ]
「ぁ、も、わかん、ない……」

はうぅぅ
ああぁ
はぁはぁ
ビクンッ
ビクンッ
ビクン
[三月シロウ]
「わからない、か。結構酷いことを聞いたんだがな」

はうぅぅ
ビクンッ
ああぁ
はぁはぁ
ビクンッ
ビクンッ
ぐいと玩具のコードを引かれて、ナカに埋められている幾つものローターに内壁を緩く擦られる。

イイトコロに当たっていたそれが遠ざかったことに不満の
喘ぎを零せば、俺の機微を見て取ったシロウがからかうよ
うに告げた。

ブゥン
ブゥン
ビクンッ
ビクンッ
ビ
ブゥン
[三月シロウ]
「もっとヨくなりたいのにって顔してるな」

ブゥン
ブゥン
ビクンッ
ビクンッ
ビクンッ
ブゥン
ブゥン
[小鳥遊レイ]
「ン、だって、こんなのじゃ、たりない……」

ブウン
ブウン
ビクンッ
ビクンッ
ビクンッ
ブウン
ブウン
腰をくねらせて、両胸に取り付けられたキャップを弄びながら甘ったるい吐息を零す。

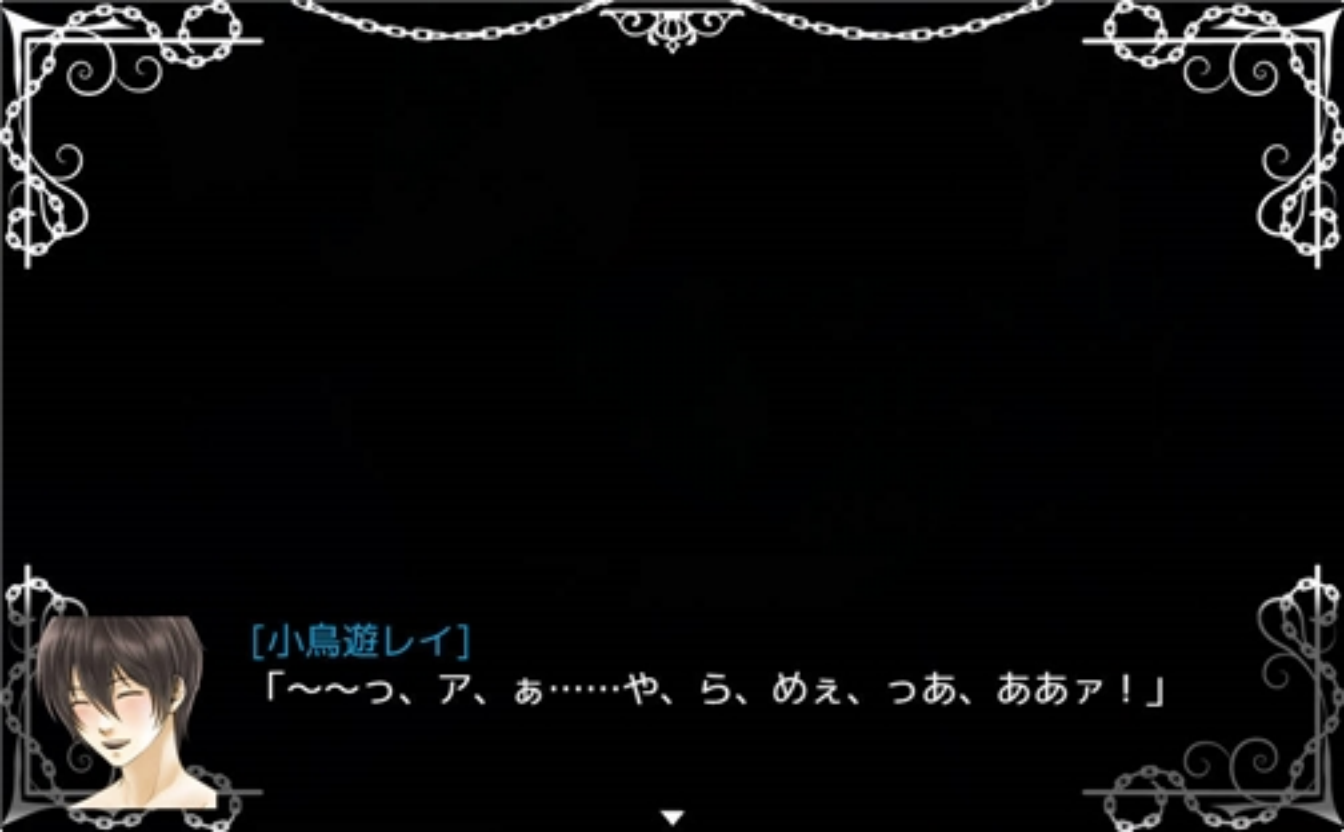
ブウンブウン
ビクンッ
ビクンッ
ビクンッ
ウンウン
俺を見て一笑したシロウが、伸びるコードをくいと引っ張った。

ブゥン
ブゥン
ビクンッ
ビクンッ
ビ
ブゥン
ブゥン
[三月シロウ]
「四つもローターが入ってるのに、こんなの扱いは凄いな」

ブゥン
ブゥン
ビクンッ
ビクンッ
ビクンッ
ブゥン
[小鳥遊レイ]
「ぅ、ぁ、らって、これ、シロウのじゃない……」

ブゥンブゥン
ビクンッ
ビクンッ
ビクンッ
ブゥンブゥン
思い描くのは、もっと熱くて大きなモノの存在。

ブゥンブゥン
ビクンッ
ビクンッ
ビクンッ
ブゥンブゥン
これも気持ちいい、けれど俺が欲しいモノじゃない。


[小鳥遊レイ]
「〜〜っ、ア、ぁ……や、ら、めぇ、っあ、ああァ！」

ズンズン
はぁはぁ
ズプッ
ズプッ
ズンズン
ビクンッ
ズプ
はぅぅぅ
ああああ
屹立から大量の精を吐き出して、何度目かの絶頂を迎える。

ズンズン
はぁはぁ
ズプッ
ズプッ
ズンズン
ぼんやりと視界に入る景色を見れば、姦濫たる嬌態が飛び込んできた。

腰を高く持ち上げられ、脚を屈曲させられたまま秘所を貫かれる体位の名前。

屹立に被せられ、先端に容赦のない快楽を与え続ける玩具の名前。

ズンズン
はぁはぁ
ズプッ
ズプッ
ズンズン
ビクンッ
ズプ
わからない、全然わからない。

ズンズン
はぁはぁ
ズプッ
ズプッ
ズンズン
けれどカズヤがスることなら、俺はなんでも良かった。
ビクンッ
ズプ

ズブッ
ズブッ
ああぁ
はううう
いい
ズンズンズンぁ！
[小鳥遊レイ]
「ん、ひァ……こ、れ、キツイ……も、むり……ア、ぁ！」

ズンズン
ズブッ
ああぁ
はうぅぅ
いい
[双葉カズヤ]
「まだイケるでしょう？」

ガンガンと腰を揺すぶられ、上壁を大振りに擦られるたび、
痺れるような快感が身体を支配する。

もう無理だ、だめだと頭が警鐘を鳴らすのに、身体はいくらでも欲して勝手に腰が動いた。

ドプッ
ズンズン
ズプッ
ビクンッ
ビクンッ
どうだ？
ズンズン
ああああ
ズンズン
ズンズン
ずっと
[小鳥遊レイ]
「ひあぁ、ァ、あ、や、あぁ、あ、ぅ」

ただいま、とタクミの声が届いた。

感じてる？

はうぅぅ

ドプッ

ズン

ズン

［小鳥遊レイ］

「っ、ふ……」

感じてる？

はうぅぅ

ドプッ

スン

スン

［七瀬タクミ］
「レイ、いい子にしてた？」

感じてる？

はうぅぅ

ドプッ

ズン

ズン

［小鳥遊レイ］

「～～っ、ぅ……！」

感じてる？
はうぅぅ
ドッ
スン
スン
[七瀬タクミ]
「あ。いまイッちゃった？　ヒクヒクしてる」

感じてる？

はうぅぅ

ドッ

ペンペン

［七瀬タクミ］
「オレもしかして、熱烈歓迎されてる？」

感じてる？

はうぅぅ

ドプッ

ズン

ズン

［小鳥遊レイ］

「っ……ン……」

感じてる？

はうぅぅ

ドプッ

スン

スン

［七瀬タクミ］

「ん……いーこ、可愛いよ」

ゆるりと髪が混ぜられる感触に、俺は見えない目を細めた。
はぁはぁ
はうううぅ
ああぁ
ズプッ
ドプッ

両目を覆われ、口を塞がれ、手足を拘束されてからどのぐらい経ったのだろう。

ぎゅぅゅ
はぁはぁ
はうううぅ
ああぁ
ズプッ
ドプッ
タクミが不在の間はずっと、以前よりも太い玩具を埋め込まれっぱなしだった。

ぅゅ
はぁはぁ
はうううぅ
ああぁ
ズプッ
ドプッ
このままでも充分に追い詰められているのに、タクミの手が玩具を掴み、ゆるゆると抜き差しされる。

ぎゅう
はぁはぁ
はうううぅ
ああぁ
ズプッ
ドプッ
強い快楽を覚えるたびに身体が跳ねれば、じゃらじゃらと
首輪の鎖が音を立てて鳴った。

ぎゅう
はぁはぁ
はうううぅ
ああぁ
ズプッ
ドプッ
[小鳥遊レイ]
「ん、ぅ、〜〜っ、ン！」

ズブッ
はうううぅ
はぁはぁ
ああぁ
ぎゅぅゅ
どブッ
[七瀬タクミ]
「物足りなかったでしょ？　今日もいっぱいヨくしてあげる」

ぎゅぅぅ
はぁはぁ
はうううぅ
ああぁ
ズプッ
ドプッ
[小鳥遊レイ]
（ちがう、ちがう、も、イキすぎて、らめ、っア！）

どうだ？
ズンズン
ビクンッ
もっと
ぬぷっ
ああぁ
はうぅぅ
いいい
は
はあ
ズプッ
ぬちゅ
ドプッ
ビクン！
ぬちゅ
[小鳥遊レイ]
「っ、～～～！」

びくびくと痙攣して、ぴんと足先を張りつめさせたまま、
また絶頂に達してしまう。

どうだ？
ズンズン
ビクンッ
もっと
ああぁ
ぬぷっ
はうぅぅ
いいい
は
はあ
ズプッ
ぬちゅ
ドプッ
ビクン！
ぬちゅ
[小鳥遊レイ]
（やら、も、ぅ……むり、だめ、こわい……）